

年度末のご挨拶 —問いからはじまる平和創造—

吾郷 眞一 (国際平和ミュージアム館長)

平和ミュージアム改装(リニューアル)事業も大詰めを迎え、開館まで半年を切りました。昨年の今頃にも少しお伝えしましたように、この改装は、ミュージアムが入るアカデミア立命21という建物全体の改修も伴うことから、単なる展示内容の模様替えにとどまらず、地階と2階部分に分かれていた展示室が地階に統合されることをはじめ、ミュージアムの構造自体も大きく変わります。外観は、ほぼ元のままですが、一歩足を踏み入れたとたんに全く新しい博物館に入ったと思われるでしょう。

しかし何といたっても重要なのが、展示自体の内容変更です。これは、当ミュージアムが、通常の博物館や美術館と違って、メッセージ性を持っており、平和教育の現場でもあるという特質によります。

そして、大学立の博物館として、学術の裏付けがあります。改装の一つの目玉でもある歴史年表は、一種の立体的歴史教科書であるとも言え、その作成には多大な時間と、大学構成員の知見が費やされました。研究者集団が展開する歴史叙述ですので、当然ながら正確性が追及されました。そのために、長時間、様々な議論がたたかわされたのです。しかし、現実にはそれを展示物として具現化しようとなると、その作業は展示物制作の専門家集団に委ねなくてははいけません。展示空間設計の専門家は、逆に歴史や政治の専門家ではありませんので、うまく意思疎通がなされないと、意図したものとは違う内容になってしまう恐れもあります。研究者としては、しっかり歴史を叙述したいので、説明文が長くなりがちです。しかし、それをすべて取り込むと、歴史年表は、あまりにも字ばかりの壁になってしまいます。なにせ全体で70メートルもある歴史年表ですので、メリハリをつけてある程度の抽象化が必要です。学者と展示専門家との間のすり合わせには、多大な時間と労力が費やされました。お互いに妥協せざるを得ないことも多かったですが、多分、結果的には素晴らしいものが出来上がるのではないかと期待しています。

一方、博「物」館ですので、文字と写真ばかりで、「もの」がないのでは始まりません。かなりの「もの」は、旧展示物をそのままか、多少修正して使いますが、全く新たに導入するものも多くあります。ここも実は頭が痛いところで、平和(戦争)の展示物はどうしても、書いたものとか、写真が多くなってしまいます。それでも工夫して、無いものはレプリカを作る、映像技術を用いる、などの努力をしていますが、年を越したすぐの段階では、まだ完全には最後の姿は見えてきていません。これから最後のラストスパートです。

私たちの作業の最後の年に大きく影を落としたのが、思っ



たより長引いたコロナ禍とウクライナ問題です。特に後者は、当館だけでなく、すべての平和博物館にとっての挑戦でした。戦争の記憶を残し、それを後世へ語り継いでいくことを重要な使命とする活動を、あたかもあざ笑うがごとく、赤裸々な武力行使が国連の常任理事国によってなされたことは、平和博物館に限らず、平和運動にとっても大きいショックでした。とりわけ、私たちの平和ミュージアムは、来館者に何かしらの希望をもって帰ってもらうことを意図していますので、あのようなことが起こってしまい、しかもまだ続いていると、見学者に無力感を抱かせしてしまうのではないかと危惧します。戦争が違法化され、集団安全保障体制が出来上がる過程を歴史年表で描き、それを強固にするものは、国際機関と市民社会が協働で行う、広い意味での国際人権保障を通じての平和創造だ、という強いメッセージを送る展示の最終部分に対する攻撃のように感じられます。

展示については、単に経済社会文化協力と人権の伸長だけで平和が達成されるという描き方はされておらず、人道に対する罪を罰する国際刑事裁判所をフィーチャーし、戦争犯罪を裁く活動も同時に行われ、武力の行使に対して伝統的な手法での対処がなされていることにも注目しています。

今回のミュージアム再構築におけるもう一つの大きい柱は、参加型展示とでも呼ぶべき性質で、いたるところで来館者には「問いかけ」がなされます。最初のエピソードがそもそも問いかけの初めで、年表展示の中でも常に質問がなされ、最後には、貴方はそれに対してどう応えていくのか、という「問いかけ展示」で締めくくられます。それだけではなく、そのままミュージアムにとどまり、2階のピースコモンズという空間で、さらなる勉強・対話が可能になる仕組みとなっています。ぜひご期待ください。

国際平和ミュージアムリニューアル工事が進んでいます！
2023年9月リニューアルオープン！



WEB

WEBサイト：リニューアル進捗状況報告（不定期更新）
<https://www.ritsumeikan-wp-museum.jp/floorguide/renewal/>



ボランティアガイドコラム

一人一人の潜在能力の可能性が保障され個人が尊重される社会を築くためには、まず平和でなければなりません。平和は、個人の尊厳と切り離すことができない普遍的価値であり、市民社会を根底から支える土台だと思います。

戦後、広島、長崎、沖縄などから始まった平和博物館は、空襲被災都市をはじめ全国各地に設立されました。平和博物館の役割は、戦争の記憶を伝えることで平和創造の主体を形成し、個人の尊厳を享受する、市民による公共を創り出すことではないでしょうか。平和博物館は社会教育施設であり、平和を育むための学びの公共空間だと思います。

平和博物館のガイドだけでなく、平和を創造する人はすべて平和ガイドという考え方があります。来館者は「見て」「感じて」「考えて」さらに「行動して」、平和ガイドになるのかもしれませんが。博物館は来館者の知識を再構成します。ガイドは来館者を支援します。子どもたちは、平和ミュージアムで見た戦争の悲惨さ、感じた平和の大切さ、考えた現在と未来を、家族や友達に伝えるというはじめの一步の行動を通して、平和のバトンを受け継いだ平和ガイドとなり、平和創造の主体を形成するでしょう。

博物館が受け入れているボランティアのあり方は、博物館がどのような学びを創るのか、市民の学びの場をどう創るのかということを示します。絵画・音楽・発表などの創作活動、イベントやフォーラム、平和講話や見学後の振り返りの活動に加え、戦争遺跡の保存、核兵器廃絶や人権問題などに参加する市民と平和ミュージアムが協

平和博物館、その役割はなんですか —市民と協働する平和博物館へ—



働すれば、平和博物館で市民が活動すること自体が学びとなるでしょう。展示物を見学するだけでなく、博物館と市民の双方向的な協働関係が、市民の主体的な学習を育てると思います。

博物館は、宝物の保存施設としての第一世代から、収集物を公開する第二世代をへて、市民が参加する第三世代と成長してきました。平和博物館は心が暗くなる展示が多いため来館者やリピーターが少ないという課題があります。今回のリニューアルでは学生やボランティアガイドの参画に期待できます。立命館大学国際平和ミュージアムは、「市民と協働する平和博物館」を視野に入れ、これまでだれも見ることがない第四世代の博物館をめざしてほしいと思います。

(ボランティアガイド：井上 力省)

学生スタッフ 活動記録



リニューアル展示のワークショップでは、学部や研究科、そして回生も異なる人達と意見を交わしながら、問いかけ案をまとめました。

はじめに、各々が考える現代の問題や、中学生に問いたい内容を出し合いました。そこから、グループに分かれて方針を決める際、それぞれの問題意識や、重視する点が異なるため、一つのテーマに絞る難しさがありました。ただ、ミーティングを進める中で、最初は異なる内容のように見えていた問題意識の中にも、繋がりがあるといふ発見もありました。たとえば、地域間格差の問題と、経済格差の問題は連動していたり、地域間格差の問題には、現代に至るまでの歴史の問題が深く関わっていたりするなど、一見独立した問題同士は連鎖しています。

その軸を重視し、私たちのグループは考えてほしいテーマを「経

リニューアルワークショップスタッフ編

「経済格差」に定めたものの、その先には、それをどのように「問いかけ」にするか、という難所がありました。想定している来館者の“中学生”の年代にも分かりやすく、なおかつ回答者自身の考えを自由に引き出せる「問い」の形にするため、グループでは何度も話し合いをし、質問の練り直しを行いました。特に工夫を要したのは、複数の問いかけの構成と、その表現です。社会や歴史の学習過程にある回答者にとっての考えるきっかけとなるように、前段階となる質問を重視しました。自由な意見を考えてもらう質問に回答者が向き合うには、先に考えるための材料や最低限の知識が必要とグループで考えたからです。そこで、世界における経済格差の問題を知ってもらおうと、選択肢形式の質問や、正確な答えを求めない質問を設けました。たとえば、「児童労働に従事する子どもの一日を想像してください」という問いによって、各人の想像を生み、その後に実際の事例を紹介する構成をとりました。経済格差という大きな問題を、一人一人の個別の人間に関わる問題として考える契機を作るためです。

このように、段階を踏んだ問いを通して、最後に当事者として社会問題に向き合ってもらいたいという狙いを込めながら、構成を考えました。しかし、問いかけ案発表会では、質問で促さずとも、今現在、問題の「当事者」として生きる人々がいるという批判もあり、改めて全体で意見交換をすることで、グループ内では見えなかった問題も明らかになりました。

普段は専攻する分野の異なる人達との活動を通し、一つのテーマであっても多様な視点があることを改めて実感できました。

(学生スタッフ：佐々木 梓)

遊心雑記

計り知れぬ自然の脅威

安齋 育郎 (国際平和ミュージアム名誉館長)



東日本大震災の津波の爪痕 (2012年6月30日、宮城県、撮影：安齋育郎)

私は数学好きなこともあって、何か目の前で現象が起こると、すぐにその理数的側面に思いが至ります。2011年3月11日に起きた東日本大震災の時もそうでした。

マグニチュード9.0でしたが、アメリカ地質調査所 (USGS) によると1900年以降、世界で4番目の規模の地震だったようです。

地震のエネルギーE (ジュール) とマグニチュードMの間には、

$$E = 10^{4.8 + 1.5M}$$

の関係があります。東日本大震災 (東北地方太平洋沖地震、

マグニチュード9.0) と1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災 (兵庫県南部地震、マグニチュード7.3) とでは、地震エネルギーは $10^{1.5 \times (9.0 - 7.3)} = 10^{2.55} = 355$ 倍違います。

この地震で東京電力福島原発に電力を供給していた東北電力の送電線が倒れ、外部電力が断たれました。頼みの網の非常用電源も、続いて起こった大津波で水没して動かなくなり、発電所に電気がない非常事態に陥り、炉心冷却用ポンプも、測定器も、照明も、何もかも働かない深刻な危機にさらされました。結果として核燃料が溶融し、大量の放射性物質が環境中に放出され、未曾有の原子力災害が起こりました。

放射線防護学が専門である私は、それ以来、仲間たちと協力して被災者支援のために福島に100回以上通い続け、現地の要請に応じて調査・相談・学習活動に微力を尽くしてきました。私たち福島プロジェクトの活動に理解のあった双葉郡楢葉町の古利・宝鏡寺の早川篤雄・第30世住職は、私たちと協力して、事故から10年目の2021年3月11日に平和博物館「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を境内に立ち上げましたが、残念ながら昨年暮れに病没されました。和尚とは50年来の協力関係がありましたが、今となっては、「伝言館」のエントランスに和尚が掲げた「MEMENTO MORI (死を想え)」というメッセージを悲しく眺めています。

団体予約受付中!



予約方法は?



当館ホームページ、FAX、電話にてご予約いただけます (電話は平日9:00~17:30)。詳しくは、当館ホームページをご覧ください。お問い合わせください。



お申し込みはこちら

立命館大学国際平和ミュージアムだより

立命館大学
国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

第30巻 第3号 (通巻89号) 2023年3月31日発行
編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL: 075-465-8151 / FAX: 075-465-7899
<https://www.ritsumeikan-wp-museum.jp/>



今後、展示・イベントのご案内、ミュージアムだより等、国際平和ミュージアムより送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、国際平和ミュージアム (075-465-7899) へ送信ください。